

## 家族形成期の夫婦関係の「質」とその後の評価

田中 慶子

(公益財団法人 家計経済研究所 次席研究員)

家族形成期の夫婦関係の「質」が、その後の夫婦関係にどのような差異をもたらすのか、初婚継続カップルを対象に家族形成期と15年後の2時点比較を行った。対象となる初婚継続グループの特徴を確認したところ、脱落グループとくらべて夫婦ともに学歴が高く、夫の家事貢献割合がやや高い傾向があるが、総じて基本属性や夫婦関係の「質」に違いはない。次に家族形成期の夫婦関係満足度の状態別に、夫婦関係の「質」を比較したところ、満足度の高いグループでは、夫の家事貢献割合が高い、コミュニケーションが多く、互いに表出的であり、「個人としての関係」に対して評価が高い。また15年後も満足度の差は維持され、平均より満足度の高いグループでは2時点とも夫の肯定的な評価が持続している人が多かった。

### 1. はじめに

家族形成期の夫婦関係の「質」が、その後の夫婦関係にどのような差異をもたらすのか。本稿では、初婚継続カップルの15年後の状況について記述的な分析を行う。近年、離婚率が上昇傾向にあることや、未婚化、非婚化の進行、女性の就業率の高まりなどを背景として、個人にとって結婚がもつ意味や、夫婦関係のあり方への関心が高まっている。恋愛結婚の普及により愛情を基盤とした結婚が増加した一方で、「夫源病」(石蔵 2012)や「家庭内別居」などの現象にみるように、不和や葛藤の多い夫婦関係の問題も指摘されている。日本では欧米ほど離婚率は高くないことから、夫婦関係の不和がただちに夫婦関係の解消につながるわけではない。しかし離婚に至る夫婦関係も含め、潜在的に緊張の高い夫婦関係が個人の心身の状態や主観的 well-being に及ぼす影響や、家族関係、とくに夫婦関係が子どもの発達に及ぼす(中

長期的な)影響が関心を集めている。欧米とは様相がやや異なるものの、日本においても良好な夫婦関係が持続する条件や、結婚や夫婦関係が個人にもたらす幸せや葛藤に表される、夫婦関係の「質」が問われるようになってきている。

「消費生活に関するパネル調査」(JPSC)では、夫婦関係に関する項目として、夫と妻の家計貢献や家事・育児の状況だけでなく、夫婦関係の「質」ともいべき夫婦間のコミュニケーションや配偶者についての評価など多面的な測定を行っている。残念なことに後者の質問は、1990年代実施の調査に多く、必ずしも同一項目が、毎年調査されているわけではないため1年ごとの変化をたどることはできないが、同一の夫婦関係を対象として10年以上の間隔をあけた中長期的な推移を観察することが可能なデータセットである。本稿では、その強みを生かして第7回調査(1999年)時点で有配偶だった者を対象として、その時点の夫婦関係の「質」によって3つのグループに分け、それ

ぞれ最新調査（第23回、2015年9月実施）において、夫婦関係の「質」がどのような差異となっており、あらわれているのかを検討する。

## 2. 先行研究

### (1) 夫婦関係の「質」の測定

家族社会学において、夫婦関係や結婚の「質」に対する関心は以前から高く、家族・夫婦の情緒構造や勢力構造として研究が行われてきた。ここで夫婦関係の質とは「夫婦関係の満足、幸福、統合、調整、役割緊張と葛藤、コミュニケーションなどの、夫婦間の相互作用と営為の質に関する諸概念を、それらが共通に夫婦関係の質的な諸次元および評価を表象する点、また密接に相互関連する点から、ひとまとめにした一般概念である」と定義される（上子 1993）。結婚の質の捉え方には、大きく2つの方法があり、1つは満足度のような主観的な判断を問うものであり、もう1つは結婚生活における行動や認知といった実際の行動、実態を問うものである（筒井・永井 2016）。かつての勢力構造のアプローチにおいては、アメリカの研究などを参考に、カップル間のコミュニケーションや、同伴行動の多さにみられる伴侶性、高額買い物などの際の夫婦の意思決定、価値観の一致などが測定されていた。しかし夫婦の勢力構造の研究は、特定の行動や状況を前提としておりアメリカとカップル文化の違う日本では、夫婦間での相互行為の持つ意味が異なっているため満足度との関連も十分に説明できないし、どのような状態を平等・対等と捉えるか、など測定の方法論的な問題も指摘されている。何よりも、夫婦関係や結婚の「質」という概念が曖昧であり、その対象も不確定である。

これらの課題はあるものの、先行研究においては、結婚満足度や夫婦関係満足度などを指標とし、実態というよりも期待や希望との相対的な評価である満足度によって夫婦関係の「質」を評価する研究が多い。満足度の規定要因や、夫婦（家族）関係の発達に伴う満足度の変化が注目されてきた。満足度の規定要因研究では、社会・経済的

属性による差異や、夫婦関係の実態、とりわけ家事・育児（分担）や夫婦間の情緒的サポートとの関連が注目されてきた。また夫婦関係満足度は結婚当初はハネムーン効果により満足度が高く、子どもの誕生や家事・育児の負担で時間の経過とともに満足度は低下し、空の巣期には再び回復するというU字カーブを描く。大規模な横断調査では、夫婦関係満足度はU字カーブを描くことがくり返し確認されてきた（岩井・佐藤 2002; 稲葉 2004, 2011; 筒井・永井 2016）。だがパネルデータによる分析では必ずしもU字カーブを描かず、右肩下がりとなっている（永井 2011; 田中 2012）。結婚年数の経過に伴う夫婦関係満足度の変化のメカニズムをより詳細に明らかにすることが必要である。また結婚満足度の評価には夫婦間で差があり、妻に比べ夫の方が、夫婦関係を良好なものとして評価する傾向もほぼ一貫している（稲葉 2011; 筒井・永井 2016）。なぜ夫婦関係の「質」は非対称となるのか、なぜ妻の満足度が低くても多くの夫婦では関係が維持されるのかを明らかにすることが求められている。

### (2) 夫婦関係満足度と関係の「質」

本稿では、夫婦関係が維持される基盤について、家事・育児以外の要素に再び注目したい。心理学の立場から夫婦関係満足度の研究をレビューした伊藤ら（2014）は、日本の夫婦関係の維持基盤について考える場合、2つの側面を考慮する必要があると指摘する。1つは「役割としての関係」で、結婚生活において、配偶者が役割分担者として重要であるかどうかである。具体的には子どもの親であること、家事・育児の担い手、家計の担い手という指標を示している。もう1つは「個人としての関係」で、道具的な役割を超えた個人としての配偶者が重要であるかどうかに関わる。具体的には性的パートナーと自分の理解者・支え手という指標である。「役割としての関係」の成立が夫婦関係維持の基礎的枠組みであり、「個人としての関係」の質が満足度の高低を規定すると捉えている（伊藤ほか 2014: 110）。この整理に従えば、これまでの夫婦関係満足度の研究は配偶者との「役

割としての関係」と夫婦関係満足度との関連をみているが、「個人としての関係」に該当する内容についても考慮する必要があるだろう。夫婦関係維持の基盤となる親密性、とくに個人にとって配偶者が重要で代替不可能な存在であるかなど、主観的な認知レベルやコミュニケーションなどとしてどのように表れているか、特定のモデルを前提とせずに改めて検討する必要がある。伊藤ら(2014)は、カップルデータの分析から、満足度の低い妻は夫との関係を「役割としての関係」に限定すること、また夫の満足度を実際より過小評価して自分の満足度に近づけ、夫の満足度との均衡を図ろうとすることを明らかにした。横断データから結婚年数によって夫婦間のコミュニケーションや態度も異なることが示されており(粕井 2014)、「個人としての関係」は結婚年数によってどのように変容していくのか、そしてそれが満足度にどのような影響があるのかを検討することが必要である。

### 3. 方法

JPSCでは、調査初期(第9回調査までの隔年)には夫婦の勢力関係に関する質問を設けていた。もちろん測定方法やその背後にある理論には検討課題も多いが、「個人としての関係」を測定している貴重なデータである。そこで本稿では、夫婦の勢力関係に関する質問がある調査回のうち回答者数が多い第7回調査(1999年)を起点として、直近の第23回調査(2015年実施)との両時点ともに有配偶で調査途中で離死別の経験がない、すなわち初婚継続者を主たる分析対象とする(以下では継続グループとする)。ただし、パネル調査であるため分析対象とする継続グループには偏りがあることが懸念される。第7回時点でも回答を継続し(コーホートAでは7回目、コーホートBでは3回目の調査にあたる)、初婚を継続したまま、第23回調査までも継続して回答しているという者に何らかの特徴があるのか確認することが必要である。最初に継続グループと、第7回時点で有配偶であったが、第22回調査までに調査から離脱した脱落グループとの違いを確認する。次に、第7回

調査時点の夫婦関係満足度を基準に、継続グループの結婚年数ごとの平均を算出し、各年の平均よりも夫婦関係満足度が低いグループ、平均とほぼ同じ程度のグループ、平均よりも満足度が高いグループの3つに分けて、グループ間の基本属性および夫婦関係の「質」の状況を比較する。最後に、第7回調査から第23回調査の15年間で夫婦関係の「質」の変化を3グループごとに確認する。

分析に使用する変数は、以下の通りである。

#### (1) 夫婦関係の「質」に関する変数

##### 夫婦関係満足度：

第7回、23回ともに、「あなたは現在の夫婦関係に満足していますか」という質問で、「非常に満足している」～「ふつう」～「まったく満足していない」の5段階で尋ねた。満足しているほど得点が高くなるように5～1点に変換した。

また、主観的指標の参考に、幸福度と生活満足度についても検討する。こちらも第7回、23回ともに尋ねており、それぞれ幸福や満足なほど得点が高くなるよう5～1点に変換した。

##### 家事分担に占める夫の貢献：

第7回調査では「お宅では、次にあげる家事を、どなたがどの程度なさっていますか。合わせて100%になるように数値を記入して下さい」という質問に対して、7つの家事の内容それぞれについて、「あなた」「ご主人」「その他の人」という3つの回答欄が設けられ、3つの合計が100%になるように数字を記入してもらった。家事の内容は、①食事のしたく、②食事の後片付け、③部屋の掃除、④子どもの登校(園)の送り迎え、⑤家庭での子どもの世話、⑥日常的な買い物、⑦家具・家電製品の修理、大工仕事など、の7つである。④子どもの登校(園)の送り迎え、⑤家庭での子どもの世話、⑦家具・家電製品の修理、大工仕事などの3つについては「していない」「子どもはいない」という非該当の選択肢を提示しているため、それらを除外した4つの家事について「あなた」と「ご主人」2つの合計を100%として、そのうちの夫の分担割合を算出した。さらに4つの夫の分担割合の累積合計も算出した。

**大切にしている時間：**

第7回調査では、「次のような1日の時間のうち、あなたがご主人と一緒に過ごすために大切にしている時間はありますか。それは合計すると1日に何時間くらいになりますか」という質問に対し「食事の時間」や「くつろぎの時間」など家庭生活の状況について多くの選択肢が提示され、本人および配偶者の平日・休日別にその有無を尋ね、一緒に過ごすために大切にしている時間の合計を尋ねている。ここでは、本人も配偶者も仕事がない日(休日)の回答を用いる。

**会話時間：**

第7回調査では「あなたとご主人の会話は1日に合計すると何時間くらいになりますか」という質問に対し、本人および配偶者の平日・休日別に時間の記入を求めている。ここでは、「大切にしている時間」と同様に、本人も配偶者も仕事がない日の回答を用いる。

**会話内容：**

第7回調査では「ご主人との会話の内容についてお尋ねします」として、以下の3つの状況を尋ねている。①「あなたは、ご主人に心の悩みや楽しい体験などを話しますか」(妻→夫)。②「では、ご主人はあなたに心の悩みや楽しい体験などを話しますか」(夫→妻)。③「ご主人とは、視野が広がり刺激を受けるような話をしますか」である。選択肢は「よく話す／する」～「ほとんど話さない／しない」の4段階である。

**夫のイメージ：**

第7回調査では「あなたは、ご主人のことを、どの程度信頼していますか」という質問に対して、①経済力のある人、②社会人として常識のある人、③社会人として倫理感のある人、④子育てや人生に共に立ち向かえる人、⑤あなたのことを大切に考えている人、⑥心の支えになる人、という6領域について尋ねている。選択肢は「非常に信頼できる」～「ふつう」～「まったく信頼できない」までの5段階(0～4点)で、ここでは得点が高いほど信頼しているように変換して用いた。

一方、第23回調査では「あなたにとって、今のご主人はどのような存在ですか。以下のイメージ

についてあなたのお考えを選んでください」という質問に対して、16種類の夫のイメージを挙げ、そう思う～そう思わないまでの4段階でそれぞれについて回答してもらった。そのうえで、「あなたのご主人に最も近いイメージはどれですか」と尋ねて16種類のイメージの中から1つを選択する質問である。

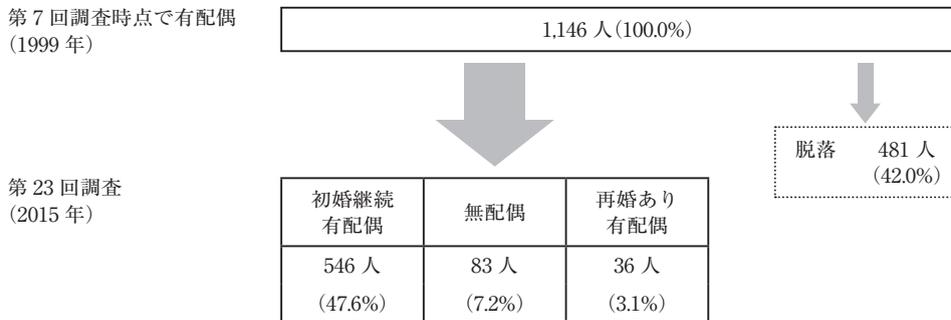
本稿では、16種類すべてをみることは煩雑になるので、第7回調査の質問内容と類似の「経済的に頼りになる人」「人生に共に立ち向かう人」「心の支えになる人」、さらに全体で最も近いイメージの上位に選ばれる「一心同体の人」「空気のような存在」「家事や育児に協力的な人」、またネガティブな側面を測定している「自由を束縛する人」「経済的に頼りない人」「そりがあわない」という項目の合計9つを取り上げる。

なお、第7回調査では夫が信頼できるかという質問であり、第23回調査では同意の度合いを回答してもらっており、測定している内容が異なっていることに留意が必要である。そのため2時点の比較という点では、選択肢として示している「経済的に頼りになる人」「人生に共に立ち向かう人」「心の支えになる人」という3つのイメージに対して肯定的に評価しているか、否定的に評価しているかという分類の移動をみるにすぎないが、選択肢の内容はほぼ同一であり、どのような態度の変化があるのかを比較する意味はあると考えている。

**意思決定：**

第7回調査では「次の①から⑦の項目について、最終的にお決めになるのはご夫婦のどちらですか」という質問をした。具体的な項目としては、①貯蓄方法・貯蓄額、②値段のはる大きな買い物、③夫婦の性生活、④家族のレクリエーション、⑤子どものお稽古事・しつけ、⑥親戚づきあい、⑦あなたの仕事・生活設計、である。これらの内容について、以下の5つの選択肢を提示している。あなただけで決める、夫に相談してあなたが決める、夫とあなたが相談して決める、あなたに相談して夫が決める、夫だけで決める。このうち、夫婦間での双方向的なコミュニケーションである「夫

図表-1 第7回調査で有配偶の対象者の遷移



とあなたが相談して決める」の割合に注目する。

**離婚に対する考え：**

第7回調査では、離婚に対する考えとして以下のような質問をしている。「近年、離婚が増加してきましたが、あなたはそれについてどうお考えになりますか。あなたのお考えに最も近いものを1つお答えください」。選択肢は、「問題のある結婚生活なら解消したほうがよい」、「自分の生き方や気持ちを大切にするのは悪いことではない」、「離婚を悪いことだとする考えが減ったので、仕方ない」、「子どもが犠牲になるので、よくない」、「どんなことがあっても、結婚生活はまっとうすべきだ」の5つである。

**(2) 基本属性**

継続グループと脱落グループの比較のために、脱落に関する先行研究を参考に、以下の回答者の基本属性を検討した。

- ①居住地：第7回調査時点での居住地を、都区および政令市、その他市、町村、海外その他に分類した。
- ②住宅：持ち家か借家かの2区分で比較した。
- ③世帯類型：夫婦のみ、夫婦と子、夫婦と親、夫婦と子と親の4つに分類した。
- ④妻と夫の年齢。
- ⑤結婚年数：結婚年齢をもとに作成した。
- ⑥子ども数および末子のステージ：人数は、第7回調査時に世帯票に記入のあった人数を用いる。末子のステージは、0歳、1～3歳、4歳～入学前、小学1～3年、小学4～6年、中学、高校以上、子どもなしに区分した。
- ⑦妻と夫の学歴。
- ⑧妻の就業状態：第7回調査時点の妻の就業状態を、有職（休

業中も含む）、専業主婦、その他の3区分とした。

**4. 結果**

最初に、第7回調査と第23回調査の2時点での遷移を確認する。図表-1に示すように、第7回調査時点で有配偶は1,146人であった。そのうち、第23回調査には回答がない、調査途中での脱落グループは481人（42.0%）である。第23回までの調査継続者のうち、この間に無配偶に変化していたのは83人（7.2%）、調査期間中に途中で無配偶に変化し、再び有配偶となっているのは36人（3.1%）であった<sup>1)</sup>。

**(1) 継続グループと脱落グループの比較**

では、継続グループと脱落グループでは、基本属性や、第7回調査時点での夫婦関係の「質」に何か違いがあるのだろうか。関係の悪いカップルは別居や離婚等で、調査から脱落、あるいは非該当になるため、第23回調査まで回答が継続している継続グループは、安定的な夫婦関係の人々に偏ってしまっている可能性がある。脱落以前の状態で両者に違いはあるのか、継続グループと脱落グループの基本属性の比較を図表-2にまとめて示す。先述の基本属性についてみると、2つのグループで第7回調査時点での居住地、住宅、世帯類型、妻の年齢、夫の年齢、結婚年数、子ども数、妻の就業状態には違いはなかったが、末子のステージおよび妻と夫の学歴はグループ間で差があった。末子ステージについて、脱落グループにくらべ継

図表-2 継続グループと脱落グループの第7回調査時点での属性

		有配偶継続	脱落	
居住地	都区・政令市	21.6%	21.0%	n.s
	その他市	58.1%	55.9%	
	町村	19.8%	23.1%	
	海外	0.5%	0.0%	
住宅	持ち家	66.2%	64.4%	n.s
	借家	33.8%	35.6%	
世帯類型	夫婦のみ	11.8%	10.4%	n.s
	夫婦と子	50.5%	56.5%	
	夫婦と親	3.1%	2.5%	
	夫婦と子と親	34.6%	30.6%	
妻の平均年齢		33.7	33.9	n.s
夫の平均年齢		36.3	37.0	n.s
結婚年数		8.9	9.4	n.s
子ども数平均		1.73	1.75	n.s
末子ステージ	0歳	9.2%	8.3%	$\chi^2 = 14.2^*$
	1～3歳	25.3%	27.2%	
	入学前	16.3%	17.7%	
	小学1～3年	19.8%	14.8%	
	小学4～6年	10.6%	12.3%	
	中学	3.1%	6.7%	
	高校以上	0.7%	0%	
	子どもなし	15.0%	12.9%	
妻の学歴	中学など	3.8%	6.2%	$\chi^2 = 8.41^*$
	高校	43.0%	48.6%	
	専門・短大	40.8%	35.8%	
	大学・大学院	12.3%	9.4%	
夫の学歴	中学など	9.9%	11.4%	$\chi^2 = 7.93^*$
	高校	38.1%	44.3%	
	専門・短大	16.8%	11.9%	
	大学・大学院	35.2%	32.4%	
妻の就業状態	有職（休業中）	49.8%	52.4%	n.s
	専業主婦	49.5%	47.0%	
	学生・その他	0.8%	0.6%	
	有職のうち正規の割合	40.8%	39.6%	

注: \*p&lt;.05, \*\*p&lt;.01, \*\*\*p&lt;.001

継続グループの方が子どものいない人がやや多い。一方で（結婚年数に違いはないが）末子の学齢が高い、すなわち相対的に出産のタイミングが早い傾向がみられる。また、学歴については夫も妻も、継続グループの方が大学・大学院卒が多く、脱落グループでは高校以下の割合が多くなっている。

次に、夫婦関係の「質」の各項目について、両グループを比較したのが図表-3である。第7回時点での夫婦関係満足度、生活満足度には差がない

が、幸福感は継続グループの方が高い傾向がみられる。統計的に有意な差があったのは、家事分担に占める夫の貢献の5項目のうち「食事のしたく」、会話内容のうち「刺激を受けるような話」の2つであった。「食事のしたく」について、脱落グループよりも継続グループの方が夫の貢献比率がわずかながら高い。また夫と「視野が広がり刺激を受けるような話」をする頻度については、する／しないの2区分でみると脱落グループの方が刺激を

図表-3 継続グループと脱落グループの第7回調査時点での夫婦関係の状況

		有配偶継続	脱落	
夫婦関係満足度	平均	3.74	3.65	n.s.
	1点	1.8%	2.7%	
	2点	7.9%	9.4%	
	3点	26.5%	27.1%	
	4点	41.5%	42.0%	
	5点	22.2%	18.8%	
幸福感 (1～5点)	平均	4.09	3.97	F=5.6*
生活満足度 (1～5点)	平均	3.62	3.52	n.s.
家事分担に占める夫の貢献	食事のしたく	4.4	2.9	F=5.3*
	食事の後片付け	5.9	4.8	n.s.
	部屋の掃除	7.2	6.7	n.s.
	日常の買い物	9.8	8.6	n.s.
	4項目合計	27.4	23.0	n.s.
大切にしている時間 (休日)	(平均・分)	361.3	347.6	n.s.
会話時間 (休日)	(平均・分)	6:01	5:47	n.s.
		241.1	231.2	
悩みや楽しい体験を話す (妻→夫)	ほとんど話さない	5.1%	5.4%	n.s.
	あまり話さない	9.7%	12.7%	
	時々話す	30.6%	34.6%	
	よく話す	54.5%	47.3%	
悩みや楽しい体験を話す (夫→妻)	ほとんど話さない	6.4%	9.8%	n.s.
	あまり話さない	18.3%	14.4%	
	時々話す	40.9%	40.8%	
	よく話す	34.3%	35.0%	
刺激を受けるような話	ほとんどしない	7.9%	12.5%	$\chi^2 = 13.8^{**}$
	あまりしない	31.0%	23.4%	
	時々する	46.6%	52.2%	
	よくする	14.5%	11.9%	
夫のイメージ(0～4点・平均)	経済力	2.72	2.68	n.s.
	常識	2.89	2.83	n.s.
	倫理観	2.88	2.77	n.s.
	共に立ち向かう	2.75	2.67	n.s.
	大切に考える	2.91	2.87	n.s.
	心の支え	2.93	2.86	n.s.
意思決定・「相談で決める」の割合	貯蓄方法・貯蓄額	31.1%	32.0%	
	大きな買い物	64.5%	63.0%	
	夫婦の性生活	59.5%	61.5%	
	家族のレクリエーション	62.6%	61.7%	
	親戚づきあい	63.2%	65.3%	
	妻の仕事・生活設計	37.4%	35.8%	
離婚に対する考え	問題あれば解消	63.7%	56.8%	
	生き方や気持ち	17.7%	23.4%	
	仕方がない	1.7%	2.5%	
	子どもが犠牲	16.4%	14.9%	
	まっとうすべき	0.6%	2.3%	

注: \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

図表-4 夫婦関係満足度のグループ別 回答者の基本属性

		第7回調査時点の夫婦関係満足度			
		平均より低い	平均的	平均より高い	
妻の年齢 (平均)		34.1	33.4	33.7	n.s.
夫の年齢 (平均)		36.8	35.9	36.5	n.s.
結婚年数 (平均)		9.4	8.5	8.8	n.s.
子ども数 (平均)		1.85	1.61	1.76	n.s.
末子ステージ	0歳	10.3%	9.5%	8.0%	$\chi^2 = 24.6^*$
	1～3歳	24.5%	28.4%	22.9%	
	入学前	15.5%	14.4%	19.1%	
	小学1～3年	27.1%	12.4%	21.3%	
	小学4～6年	11.6%	13.4%	6.9%	
	中学	1.9%	3.5%	3.7%	
	高校以上	0.6%	1.0%	0.5%	
	子どもなし	8.4%	17.4%	17.6%	
妻の学歴	中学など	5.2%	3.0%	3.7%	$\chi^2 = 15.6^*$
	高校	49.7%	43.8%	37.2%	
	専門・短大	38.7%	42.8%	40.4%	
	大学・大学院	6.5%	10.4%	18.6%	
夫の学歴	中学など	12.3%	10.0%	8.0%	n.s.
	高校	37.4%	39.3%	37.8%	
	専門・短大	20.0%	15.4%	14.9%	
	大学・大学院	30.3%	35.3%	39.4%	
妻の就業状態	有職 (休業中)	47.1%	50.7%	50.5%	n.s.
	専業主婦	52.3%	49.3%	47.9%	
	学生・その他	0.6%	0.0%	1.6%	
	有職のうち正規の割合	32.2%	46.8%	40.0%	
結婚までの交際期間	半年未満	13.0%	6.5%	10.1%	
	1年以内	15.6%	22.9%	32.4%	
	2年以内	27.9%	28.9%	21.3%	
	3年以内	14.9%	11.9%	11.7%	
	3～5年	15.6%	16.4%	11.2%	
	5年以上	13.0%	13.4%	13.3%	

注: \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

受けるような話を「する」が多くなるが(脱落グループ:時々する52.2%+よくする11.9%=64.1%、継続グループ:同46.6%+14.5%=61.1%)、脱落グループでは「ほとんどしない」が多く、両者では内訳の構成がやや異なる。全体の傾向としては第7回調査時点での夫婦関係の「質」は、脱落グループの方が顕著に夫婦関係が悪いとは言えないものの、継続グループの方が夫の家事貢献がやや高い、休日の会話時間が長いなどの傾向がみられ、夫婦の伴侶性や同伴行動といわれる側面での差がみら

れる。また継続グループでは、離婚について「問題のある結婚生活なら解消したほうがよい」という意見がやや多くなっており、夫婦関係に対する基本的な考え方がやや異なっている可能性も示唆される。

## (2) 家族形成期の夫婦関係満足度

次に、第23回調査まで継続している対象者に限定して、第7回調査時点での夫婦関係満足度によって、その後の夫の評価や夫婦関係がどのように異

図表-5 夫婦関係満足度のグループ別 第7回調査時点の夫婦関係の「質」

		第7回調査時点の夫婦関係満足度			
		平均より低い	平均的	平均より高い	
夫婦関係満足度	平均	2.59	3.79	4.64	F=723.6***
幸福感 (1～5点)	平均	3.54	4.09	4.54	F=115.0***
生活満足度 (1～5点)	平均	2.99	3.64	4.11	F=93.1***
家事分担に占める夫の貢献	食事のしたく	3.2	4.1	5.7	n.s.
	食事の後片付け	3.1	5.8	8.2	F=5.43**
	部屋の掃除	4.7	7.8	8.5	n.s.
	日常の買い物	6.8	11.4	10.7	F=4.23*
	4項目合計	17.8	29.4	33.1	F=5.60**
大切にしている時間 (休日)	(平均・分)	244.1	385.0	436.2	F=23.5***
		4:04	6:24	7:16	
会話時間 (休日)	(平均・分)	159.1	239.8	307.1	F=19.6***
		2:39	3:59	5:07	
悩みや楽しい体験を話す (妻→夫)	ほとんど話さない	14.8%	1.5%	1.1%	$\chi^2 = 134.7***$
	あまり話さない	24.5%	5.0%	2.7%	
	時々話す	37.4%	31.3%	23.9%	
	よく話す	23.2%	62.2%	72.3%	
悩みや楽しい体験を話す (夫→妻)	ほとんど話さない	17.4%	2.0%	2.1%	$\chi^2 = 86.7***$
	あまり話さない	29.7%	15.9%	11.7%	
	時々話す	38.7%	44.8%	38.3%	
	よく話す	14.2%	37.3%	47.9%	
刺激を受けるような話	ほとんどしない	21.9%	3.0%	1.6%	$\chi^2 = 129.1***$
	あまりしない	47.1%	29.4%	19.1%	
	時々する	26.5%	57.2%	52.1%	
	よくする	4.5%	10.4%	27.1%	
夫の信頼 (0～4点・平均)	経済力	2.16	2.74	3.16	F=56.93***
	常識	2.27	2.91	3.37	F=72.23***
	倫理観	2.34	2.86	3.34	F=58.23***
	共に立ち向かう	1.88	2.82	3.37	F=137.4***
	大切に考える	2.01	3.00	3.54	F=154.6***
	心の支え	1.94	3.08	3.58	F=173.4***
意思決定・「相談で決める」の割合	貯蓄方法・貯蓄額	18.7%	36.8%	35.6%	
	大きな買い物	54.2%	66.7%	70.7%	
	夫婦の性生活	49.7%	63.7%	63.3%	
	家族のレクリエーション	51.6%	64.7%	69.7%	
	親戚づきあい	52.3%	66.7%	69.1%	
	妻の仕事・生活設計	31.6%	35.8%	44.1%	
離婚に対する考え	問題あれば解消	61.3%	65.8%	63.3%	n.s.
	生き方や気持ち	20.6%	19.1%	13.8%	
	仕方がない	3.2%	0.0%	2.1%	
	子どもが犠牲	13.5%	15.1%	20.2%	
	まっとうすべき	1.3%	0.0%	0.5%	

注: \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

図表-6 第7回と第23回時点 主観的指標の結果 全体(対応のある t 検定)

	第7回 (平均)	第23回 (平均)	相関係数	t 検定
夫婦関係満足度	3.75	3.19	0.42	12.75***
幸福感	4.09	3.67	0.36	11.65***
生活満足度	3.62	3.39	0.33	5.179***

注: \*\*\*p&lt;.001

なるのかを観察する。

分析に先立ち、第7回調査時点での基本属性や夫婦関係の「質」と夫婦関係満足度との関連を確認しておこう。先述の通り、夫婦関係満足度は、結婚経過年数によって変化する。継続グループは第7回調査時点では妻年齢は26～40歳の範囲であるが、結婚年数は、0年(新婚)～21年までと幅広く、調査時点の夫婦関係満足度の水準は結婚年数の影響を受けてしまう。そのため、ここでは、継続グループの結婚年数別の夫婦関係満足度の平均値を算出して、各回答者の回答との差分を計算し、結婚年数別の平均値より低い/ほぼ平均/平均値より高い、という3つのグループに分ける。これにより、同様の結婚経過年数の中で、各個人の夫婦関係の相対的な評価を捉えられる<sup>2)</sup>。

図表-4に3つのグループごとに回答者の基本属性を比較した結果をまとめている。基本属性について妻と夫の年齢、結婚年数、子ども数に違いはない。統計的に有意な差があったのは、末子ステージ、妻の学歴であった。末子ステージは、グループ間で異なり、夫婦関係満足度がほぼ平均、あるいは平均より高いグループでは、子どもなしが2割近くと多くなっている。妻の学歴構成は夫婦関係満足度が平均より高いグループでは大学卒が多く、低いグループでは高卒までの割合が多くなっている。ただし、夫の学歴構成には違いがなかった。また、妻の就業状態や、結婚までの交際期間(第19回調査で質問)による違いもみられなかった。

図表-5には、3つのグループ別に、第7回調査時点での夫婦関係の「質」の状況を比較した。最初に第7回調査時点での夫婦関係満足度は、平均値より低い/ほぼ平均/平均値より高いグループの順に、2.59、3.79、4.64であった。幸福感、生活満足度についても第7回調査時点の夫婦関係満

足度が平均より高いグループが最も高く、順にほぼ平均、平均より低いグループである。夫の家事貢献については、食事の後片付け、日常の買い物ではグループ間に違いがあり、ほぼ平均、平均より高いグループほど夫の家事貢献比率が高い。大切にしている時間や休日の会話時間においても差があり、悩みや楽しい体験を話す頻度も異なっている。夫婦関係満足度が平均より低いグループでは、他の2グループに比べて夫とのコミュニケーション量が少なく、悩みや楽しい体験を話すという表出的なコミュニケーションも少ない<sup>3)</sup>。夫のイメージ(信頼)についても3グループで差があり、いずれの項目でも夫婦関係満足度が平均より高いグループでは肯定的な評価で、平均より低いグループでは否定的な評価であった。「経済力のある人」や「社会人としての常識」での差は大きくないが、「心の支えになる人」「あなたのことを大切に考えている人」といった項目での差は大きく、夫婦関係のうち「役割としての関係」よりも「個人としての関係」の質の評価の差が、満足度と関わっていることが推察される。

### (3) 家族形成期の夫婦関係満足度と

#### その後の夫婦関係の「質」

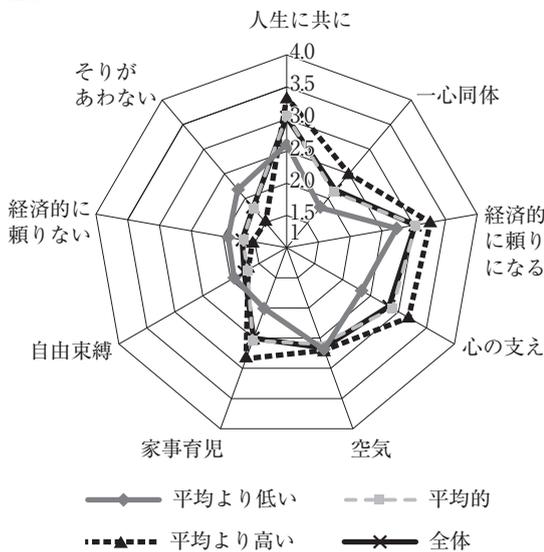
最後に、先述の第7回調査での夫婦関係満足度の3グループ別に、15年間隔があいた第23回調査時点での夫婦関係の「質」をみてみよう。分析に先立ち、継続グループの2時点での夫婦関係満足度の平均をみると(図表-6)、第7回(結婚年数の平均8.9年)では3.75点であったが第23回では3.19点と低下している。これは先行研究が示すように結婚年数の経過に伴う低下によるものと考えられる。参考までに幸福感と生活満足度についても平均は低下しており、加齢に伴う否定的な評価への

図表-7 夫婦関係満足度のグループ別 2時点の主観的指標の変化

		第7回調査時点の夫婦関係満足度			
		平均より低い	平均的	平均より高い	
夫婦関係満足度	第23回時点	2.68	3.21	3.57	F=41.5***
	23回-7回	0.09	-0.58	-1.07	F=66.3***
幸福感	第23回時点	3.35	3.71	3.89	F=23.8***
	23回-7回	-0.19	-0.38	-0.64	F=13.0***
生活満足度	第23回時点	3.09	3.39	3.64	F=17.4***
	23回-7回	0.11	-0.25	-0.47	F=14.0***

注: \*\*\*p<.001

図表-8 夫のイメージのグループ間比較



変化を確認できる。

先ほど用いた第7回調査時点の夫婦関係満足度による3つのグループ別の結果を図表-7にまとめている。第7回時点で平均より高かったグループでは15年経過しても夫婦関係満足度は最も高く3.57、ほぼ平均のグループは3.21、平均より低いグループでは2.68である。2時点の差の平均をみると、平均より低いグループではプラスになるが、他の2グループはマイナスとなっている。幸福感と生活満足度についても確認しておく、幸福感はいずれのグループもマイナスとなったが、生活満足度は夫婦関係満足度と同様に水準が最も低いが、2時点の差は平均より低いグループのみプラスになり、肯定的な方向への移動が多いことを示している。

夫のイメージについて比較すると(図表-8)、いずれの項目でも夫婦関係満足度が平均より高かったグループでは、「人生に共に立ち向かう人」「一心同体の人」「経済的に頼りになる人」「心の支えになる人」「家事や育児に協力的な人」という、良い夫のイメージの項目では、「そう思う」と肯定する人が多く、またネガティブな側面を測定している「自由を束縛する人」「経済的に頼りない人」「そりがあわない」という項目では「そう思わない」という否定する人が多かった。ただし「空気のような存在」のみ、グループ間での差がない。夫のイメージに最も近いものを1つ選択する質問で、上位3つの回答は、平均より高いグループとほぼ平均のグループでは同じになり、第1位「人生に共に立ち向かう人」(高いグループ: 29.3%、平均グループ: 27.9%)、第2位「心の支え」(高いグループ: 21.3%、平均グループ: 14.9%)、第3位「空気のような存在」(高いグループ: 11.2%、平均グループ: 12.4%)であった。一方、低いグループでは第1位は「空気のような存在」(22.6%)、第2位「人生に共に立ち向かう人」(15.5%)、第3位「そりがあわない」(12.9%)の順となっている。「人生に共に立ち向かう人」と「空気のような存在」が選択されるという点では3グループ共通だが、その出現比が異なる。また第7回調査時点で夫婦関係満足度が低かったグループでは、15年後のイメージでも否定的な項目が上位にある。(関係満足度の水準自体はやや回復していても)夫婦関係の潜在的な緊張や不和が存在しているのか、あるいは他のグループとは関係性を表出するスタイルや回答態度が異なっている可能性を示唆している。

図表-9-1 夫のイメージ「経済力のある人」の移動(全体%)

	第7回調査時点の夫婦関係満足度		
	平均より低い	平均的	平均より高い
信頼できない→思わない	12.4%	3.0%	0.5%
信頼できない→思う	7.2%	1.0%	0.5%
ふつう→思わない	16.3%	10.0%	4.8%
ふつう→思う	35.3%	24.4%	18.2%
信頼できる→思わない	4.6%	10.9%	8.6%
信頼できる→思う	24.2%	50.7%	67.4%

図表-9-2 夫のイメージ「人生に共に立ち向かう人」の移動(全体%)

	第7回調査時点の夫婦関係満足度		
	平均より低い	平均的	平均より高い
信頼できない→思わない	17.0%	1.5%	0.0%
信頼できない→思う	15.7%	2.5%	0.0%
ふつう→思わない	16.3%	7.0%	4.3%
ふつう→思う	30.1%	24.9%	9.7%
信頼できる→思わない	3.3%	9.5%	8.6%
信頼できる→思う	17.6%	54.7%	77.4%

図表-9-3 夫のイメージ「心の支えになる人」の移動(全体%)

	第7回調査時点の夫婦関係満足度		
	平均より低い	平均的	平均より高い
信頼できない→思わない	20.8%	1.0%	0.0%
信頼できない→思う	8.4%	1.0%	0.0%
ふつう→思わない	21.4%	10.4%	3.7%
ふつう→思う	25.3%	10.4%	5.3%
信頼できる→思わない	7.8%	16.9%	15.0%
信頼できる→思う	16.2%	60.2%	75.9%

第7回調査で尋ねている「経済力のある人」「人生に共に立ち向かう人」「心の支えになる人」3項目について2時点間での評価の遷移をみてみよう。ここでは、第7回調査の5つの選択肢を「信頼できない」「ふつう」「信頼できる」の3つに再区分し、第23回調査の方も4つの選択肢を「思わない」「思う」の2区分として、2時点の回答の組み合わせを図表-9-1～3に示す。いずれの項目においても夫婦関係満足度が平均より低いグループでは、信頼できない・思わないという否定的な評価のままという人が多い。他方、残りの2つのグループで「信頼できる・思う」という肯定的な評価のままという人が半数以上を占めており、満足度が平均以下のグループの2割前後と比べて差がある。一方で、第7回調査時点よりイメージが悪い方に遷移している人（信頼できる・思わない、

ふつう・思わないの組み合わせ）や、良い方に遷移している人（信頼できない・思う、など）はいずれのグループでも一定数おり、経年により夫のイメージが変化している人と、15年を経ても夫への評価が変わらない人がいることを確認できる。全体として第7回時点で夫婦関係満足度が平均より高いグループでは、いずれの項目でも「信頼できる・思う」で変化なしという人が顕著に多く、「個人としての関係」に対する評価が高く、安定的であることが、夫婦関係満足度の高さに影響していると思われる。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では家族形成期の夫婦関係の「質」が、その後の夫婦関係にどのような差異をもたらすのか、

JPSCの初婚継続カップルの15年後の状況について記述的な分析を行った。まず継続グループの特徴を確認したところ、脱落グループとくらべて夫婦ともに学歴が高く、夫の家事貢献割合がやや高いといった傾向がみられたが、全体としては学歴を除き基本属性や夫婦関係の「質」に違いはない。次に家族形成期の夫婦関係満足度の状態別に、夫婦関係の「質」を比較したところ、満足度の高いグループでは、夫の家事貢献割合が高い、休日の夫婦でのコミュニケーションが多く、互いに表出的なコミュニケーションであり、夫のイメージも信頼が高いが、とくに「役割としての関係」よりも「個人としての関係」についての信頼が高いことが明らかとなった。また夫婦関係満足度の違いは15年間の間隔をあけても維持されており、平均より満足度の高いグループでは2時点でも肯定的な評価が持続している人が多かった。

本稿の分析は2時点の比較であり、また両時点では夫婦関係の「質」(夫のイメージについて)の測定方法が少し異なっていることから、結果の解釈には留意が必要であるが、家族形成期の夫婦関係満足度みる夫婦関係の状態が15年間という期間を経ても持続していること、そして家族形成期における夫婦関係満足度と、15年後の夫に対するイメージの評価とは関連がみられるが、唯一「空気のような存在」という項目だけは、差がなかった。「空気のような存在」というイメージは、語意にあるネガティブなものではなく、満足ゆえの心地よい関係性や、空気のように自然で常に存在しているといったポジティブな評価の選択肢として理解されているのかもしれない。測定内容の信頼性や妥当性の確認、そして「個人としての関係」はどのような領域・項目から構成されるのか、理論的な議論も必要であろう。パネル調査ゆえ、調査当初に設定した質問項目を変更すること、あるいは新規に追加することは容易ではなく、新しい研究課題に応えるには制約が大きいが、パネルデータだからこそ夫婦関係の「質」の変化を詳細に観察できるメリットをより生かした分析を今後も試みてみたい。

## 注

- 1) 第7回調査の有配偶のうち、10.3%が離死別を経験していることになる。脱落の理由に、離死別やそれに伴う転居なども含むことを考慮すると、JPSCは全体の動向に比べやや離死別発生率が高い傾向がある。この理由については、改めて検討したい。
- 2) ただし、夫婦関係満足度は初期値(ここでは第7回調査時点)が低い場合は、その後、高低の両方向に移動が可能であるが、初期値が最も高い場合はその後の推移は維持か、低下のみとなるため注意が必要である。
- 3) もちろん妻の夫婦関係満足度と夫婦間のコミュニケーションの因果、そして夫婦間のコミュニケーションのあり方は双方向的規定されるので、一方向的な解釈であり留意が必要である。

## 文献

- 石蔵文信, 2012, 『妻の病気の9割は夫がつくる——医師が教える「夫源病」の治し方』マキノ出版。
- 伊藤裕子・池田政子・相良順子, 2014, 『夫婦関係と心理的健康——子育て期から高齢期まで』ナカニシヤ出版。
- 稲葉昭英, 2004, 「夫婦関係のパターンと変化」渡辺秀樹・嶋崎尚子・稲葉昭英編『現代家族の構造と変容——全国家族調査[NFRJ98]による計量分析』東京大学出版会, 261-275。
- , 2011, 「NFRJ98/03/08から見た日本の家族の現状と変化」『家族社会学研究』23 (1) : 43-52。
- 岩井紀子・佐藤博樹編, 2002, 『日本人の姿——JGSSにみる意識と行動』有斐閣。
- 粕井みづほ, 2014, 「夫婦間コミュニケーションの特徴と結婚年数による違い」『日本家政学会誌』65 (2) : 50-56。
- 上子武次, 1993, 「結婚満足度の研究」森岡清美監修『家族社会学の展開』培風館, 289-302。
- 永井暁子, 2005, 「結婚生活の経過による妻の夫婦関係満足度の変化」『季刊家計経済研究』66: 76-81。
- , 2011, 「結婚生活の経過による妻の夫婦関係満足度の変化」『社会福祉』52: 123-131。
- 田中慶子, 2012, 「『出会い』とその後の妻の夫婦関係満足度の推移」『季刊家計経済研究』96: 58-67。
- 筒井淳也・永井暁子, 2016, 「夫婦の情緒関係——結婚満足度の分析から」稲葉昭英・保田時男・田淵六郎・田中重人編『日本の家族1999-2009——全国家族調査[NFRJ]による計量社会学』東京大学出版会, 23-45。

たなか・けいこ 公益財団法人 家計経済研究所 次席研究員。主な論文に「『友人力』と結婚」(佐藤博樹・永井暁子・三輪哲編『結婚の壁——非婚・晩婚の構造』勁草書房, 2010)。家族社会学専攻。  
(tanaka@kakeiken.or.jp)